

「対話と実行」座談会（H20.6.3(火) 南国市）の概要

知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット（以下のURL参照）を基に説明。

（<http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf>）

座談会

【減反政策の見直し、コメの消費拡大】

Aさん：最近、国会でも非常に騒がれている、与党の中でも意見が交わされている減反政策についてだが、これ以上の減反を進めたら、遊休農地も崩壊すると思うので、できたら高知県は減反をやめていただいて、そして、消費拡大にも力を入れていただきたい。南国市で「こめ地産地消の会」という会を10人の農家で作っているが、それぞれ畜産農家と連携しての堆肥の作物への導入や、コメの消費拡大のために福祉施設、病院、学校、保育園での餅つきなどのPR活動などをやっている。今年は山間地帯の幼稚園へ餅つきに行ったが、非常に園児が元気で、「お米を食べているか」と聞くと、ほとんどがお米を食べていて、お米の元気さが象徴されているのではないかとつくづく思った。来月7月の半ばには、岡豊高校で米粉を使った料理教室を行うし、8月には高校生が中学生と料理を作って交流をしたいということで、非常に拡大していくのではないかと考えている。消費拡大は全国的に「早寝早起き朝ごはん」をキャッチフレーズとしてやっているが、まだまだPRが足りない。知事さんもテレビで地産地消を推進していると常に言われているが、「早寝早起き朝ごはん」もPRしていただき、高知県で一人が一杯ご飯を食べていただいたら、県では取れるお米が足らなくなるのではないかと感じているので、お米の消費拡大に向けてもやっていただきたいし、また、減反政策の見直しも早急にやっていただきたい。

知事：減反政策について、地域によって米価が低迷していることへの対応の立場が違う、その結果として、今日官房長官とその他の方とのあつれきが報道されていたが、本県の場合は既に相当減反に協力をしてきている過去があるわけで、そういう中で、強制的な減反というより、自主的なお取り組みにまずは任せてみて、それでどうなるかということを見ていくというスタンスではないかと考えている。消費拡大の観点からいうと、「早寝早起き朝ごはん」運動も、食育の推進に絡めて教育委員会ともタイアップして進めている。お米の話ではないが、国内の農産物の消費拡大を図っていくことは、園芸作物の産地である本県にとって、非常にプラスになることである。他方、自給率が低迷しているのをどう解決するかという話もあり、今、農水省などにも働きかけているのは、まず野菜の消費量を全国的に拡大するような活動をやってみませんかということである。そうすればそれに伴って、野菜と一緒にご飯も食べましょうかということになっていくのではないかと考えている。いずれにしても、国内農産物の消費を国内で増やすという運動については、熱心に取り組んでいきたいと考えており、そのときに確かにお米の話も忘れてはいけないと思う。今後給食についても、できるだけ地産地消で健康にいいものをということで取り組んでいこうとしているので、その中でも視野に入れていきたい。

【ユートピア構想について】

Bさん：私は夢の話で、知事の前で夢の話をするのは失礼かと思うが、私と同じ夢を見ていただけたら非常にありがたい。10数年前、直販店を3軒の農家で立ち上げて、そのときからの長い夢である。それは、ユートピア構想で、高齢社会になり、また、私たちの団塊の世代が会社を退職してこれからの余生をいかに有意義に暮らすかというときに、農業がベースで、農業をしながら自給自足で、コメや野菜を作ったり、鶏や牛を飼ったりして、みんなで支え合い、協力し合う生活の構想である。元気な方が高齢者の手助けをしてあげたり、さらに、農作業をすることによって、病院にもあまり行かなくてもいい、そういう楽園というか、助け合える場所ができればいいなと長い間思っていた。これは実現するのは非常に難しいが、知事さんにも同じように夢を見ていただけたら、高知県にそういう場所がひょっとしたらできるのではないかと考えているので、是非ご検討をお願いしたい。

知事：余生を有意義に暮らすといったときに、私も、(5つの基本政策の中で)「日本一の健康長寿づくり」という話をさせていただいているが、できるだけ健康寿命を長くしていく、その中で地域の方々が助け合っていく、そのようなユートピアというように区切った村があるかどうかは別として、そういう土地が日本で高齢化が進んでいくときには必要だとしたときに、本県は自然が豊かで、素晴らしい1次産業の素材がたくさんあって、そういうことには非常に向いている地域だろうと思う。今後人口を増やしていくといったときに、U、V、Jターン組の方々にできるだけ帰ってきてもらえるようなことが考えられないものかなと思っている。そうすると、それにあわせて若い人の職、例えば社会福祉の介護関連の分野の仕事が生まれてくる。そうすると、若い人も残るとか、また、やってくるとか、そういう形にしていくことが一つの理想的な形だろうと思っている。ただ、そのために必要となる基本的な条件の整備がないといけない。例えば医療の問題である。高知市周辺地域は比較のお医者さんの数が多いが、特に自然が豊かな地域になればなるほどお医者さんが少なくなっていたりするとか、ブロードバンド、ITがどれだけ発達しているかということが最終的には医療などにも非常にかかわってくるとか、また、そもそも道の問題とか、いくつかクリアしないといけない条件があると思う。ユートピア構想について、本県がそういう地域であろうと考えたときに、それに向かって進んでいくとすれば、どういう条件整備が必要かということは考えていきたいと思っている。言い古された話かもしれないが、社会福祉が新しい産業になるだろうとされていて、都会での社会福祉とは違う本当の意味で人間らしい社会福祉というのを提供できる地だと思うので、その良さというのを活かすにはどうすればいいかを考えないといけないと思っている。

【かざぐるま市の取り組み、料理の仕方を含めたPR、加工品づくり、野菜以外の販売】

Cさん：私はJ A南国市の女性部活動の組織活動の一環として平成10年にかざぐるま市という野菜の直販市を作った。去年で10年を迎え、お客さんは200万人を達成している。今までは女性部活動というと、女性の地位向上など、形ではない精神的なものが多かったが、経済活動ということで立ち上げた。現在は、売り上げ3億円を目指してやっているが、量販店の中にもこのような直販部門ができているので2億9千万くらいである。自分たちの野菜を売ることによって、A品だけではなく、B品にもそれなりに値段をつけてということで管理している。また、

無農薬栽培もしているが、売るだけではなくて、新しい野菜、旬の野菜をどのようにして食べていくかということが十分に行き渡っていないので、生産者と消費者と一緒にあって、加工の方まで進めていきたいなと希望を持っている。現在は、広域農道の隣にあるので、いろいろ販売物にも規制もかかっているが、私たちの目指す本当においしい野菜、食べ方、果物などについても広めていきたいと思う。もう一つは、今置いているものが野菜だけなので、お肉やお魚なども販売できれば本当にありがたいと思っている。

知事：200万人で2億9千万、すごいですよね。私も地産地消をコマーシャルでも申し上げさせていただいているが、今後高知県のいろいろな産物売り込んでいくに当たって、ターゲットによってかなり細かく考えないといけないと思っている。地産地消、地元のを地元で売るというのが一つ、それから地元のを高知市で、高知県は79万人で小さい県だと言われるが、高知市は35万人で結構大きい都市であるので、地域のものを今度は高知市で売っていく、さらにそこで成功するようなものは県外でも売れていくようになると思う。地域の皆様がいきなり東京で売ることや、高知市まで持って行くのは大変かもしれないが、地元で自分で加工したり調理したりしたものを売る場があるということは素晴らしいと思う。この間田野町に行ったときもお話を聞いて、田野駅屋さんが非常に活躍しておられる。おばあちゃんが作られた野菜で自家消費で残ったものを今までは捨てていた、ところが田野駅屋さんができたおかげで、漬物にしたものを朝持ってこられて売ることによって現金収入が入るとか、また、出品者同士が駅屋に集まってこられるということで、つながりができたり、見守りができたりするということをおっしゃっていた。まず、その売る場所が地場に存在するかどうかということが大切なことだと思う。そういう地域の産物を地域で売る場が全県内でしっかりそろっているということが、加工品を売るにしても何をしてもまず基礎的な条件ではないかと思っているので、そういうことは本当に考えていきたいと思っている。

もう一つは、今おっしゃられた、食べ方とか料理の仕方とかも含めてPRしていくということも確かに大切だと思う。これは特に県外なんかにはアピールしていくときに大切なことだと思う。東京でアンテナショップなどいろいろ高知県でやってきたことを見に行ったりして、反省点としてあるのは、例えば高知県のアンテナショップでカツオを売っている。高知から届いたカツオをタレも一緒に売っているが、カツオとタレだけで食べ方を教えていない。そうすると東京の人はどうするかというと、カツオとタレとショウガをつけて食べている。それでは本来の意味でのおいしさは出せないわけで、食べ方も含めてPRするということをやっていかなければいけないのかなと思っている。

1.5 次産業化の話について、最近常に申し上げさせていただいているのは、高知県の産業振興といったときに、高知県の経済が、すべてできることをやり尽くした結果、今のように低迷しているのかということ、決してそういうことではない。逆に言うと、まだまだ取り組む余地がたくさんある県だと思っている。いつも申し上げていることだが、分母に農産品の産出額をとって、分子に食品加工額をとる、これはどれだけ作った農産物を加工して売っているか、付加価値をつけて売っているかという比率だが、この比率が全国で46位である。同規模の農業産出をやっている県に比べてすごく低い状況である。生産物で、B品、ハネ物であったりすると、それを捨てているということも聞くが、そのような産品でも、加工して少しでも現金収入にす

れば、少しでもよくなるのではないかということを考えていて、こういう取り組みをやるためにまずさっきおっしゃられた、かざぐるま市、こういう売場所があるということは大切だと思っている。是非頑張ってくださいと思う。

【農家レストランと料理の仕方を含めたPR】

Dさん：私は農家の経営者の一人だが、60歳になってから野菜のソムリエの資格を取り、昨年から県の認定も受けている。かざぐるま市へ出荷もしているが、家に加工所を作り、自分の野菜をおいしく加工して出荷している。出荷してお客さんに「このお野菜はどうやって食べればおいしいですか」とよく聞かれる。今、農家レストランというのが流行っていて、そういうものが南国には山の方に一つあるが、街にもあれば、多くの方が利用していただいて普及ができるのではないかと思う。今、農漁村女性グループの一員として、高校とか小学校へ伝承料理、皿鉢料理などの普及にも行っている。南国市ではいろいろな野菜ができるし、その食べ方などをみんなに知ってもらったらいいと思う。それが街でできる方法はないか。

知事：どのように地産地消を進めるかといったときに、例えば、道の駅「四万十とおわ」では、地場産品の売場にレストランも地元で併設して構えてやっておられる。さらにもっと発展していくためには、高知市などでそういう場を構えられるといいと思う。地場産の野菜を、例えば高知市なら高知市で、場合によっては県外でもあるが、どのようにしてもっと売れるようにするか、それを今一生懸命考えており、正に今工夫をしているところである。

Dさん：なるべくならかざぐるま市の近くでそういう施設があれば、その野菜を使ってできる。

司会：かざぐるま市がある場所が、農用地で、販売の方は許可が下りているが、飲食店の方は認可が下りないという問題があるようである。その辺を何とか、同じ農業、農家レストラン的なもので、農業対策への検討をできないものかと思う。

知事：何が難しいか、また研究をして、具体的に調べてお答えをします。

【中心商店街の活性化】

Eさん：南国市が経済的に元気になるためには、大企業の企業誘致がキーワードになってくると思っているが、もう一つは、中心商店街の活性化が、意外に何か大きな可能性を持っているのではないかと私たち若手は感じている。今や全国的な問題になっている中心商店街の衰退だが、今後、商店街の活性化を考えると、行政、商店街、商工会、地産地消の会、それぞれの力を持った団体があるのに、今ひとつしっかりと手を組んでいないような感じがしている。うまく地域をあげて取り組めば、もっともっといいものができるのではないかと思っている。地域の衰退ということについて、県としての考えや新たな取り組みがあれば教えていただきたいのと、お願いにはなるが、これからまちづくりをするに当たって、若者の力を十分に活用していただきたいということ、また、若者にチャンスや希望の持てる後押しを行政の力をもって考えていただきたい。

知事：中心商店街の活性化は、まず高齢者に優しいまちづくりということで、やはりコンパクトでないといけない、それから、車であっちに行ったりこっちに行ったりしないと用が全部済まないという街は環境にもよくないということもある。中心市街地の活性化は、中心商店街のエゴだと言われたりすることがあるが、決してそういうことではなくて、今の時代の要請に沿ったもので、大切なことだと思う。私は高知市の帯屋町もあれぐらい衰退しているのは非常に残念だなと思っているし、何とかしないといけないと思っている。そしてもう一つは、大規模量販店は観光地にはならないと思う。中心商店街だからこそおもしろく、観光地にもなるという点において、やはり中心市街地の活性化が必要だと思う。どのようにこの活性化をするのかについては、いろいろなアイデアがあって、それを国全体も行政としてコンパクトシティ化といって、中心市街地をいかに活性化するかという方向に転換を図りつつあるというのはご存知のとおりだと思う。そのときに、主となるコンセプトが中心商店街ごとに必要だろうと思う。これは今後、商店街の皆さんと行政がそれぞれ地域地域のよさを活かして議論して決めていくことだと思うが、私は、例えば高知市だったら、中心商店街に行ったらリトル高知があるというか、県内各地の産品がずらっと並んでいる状態であれば、いい観光地になると思う。ひろめ市場が流行っているのは、正にその趣があるからだと思う。南国市さんだったらどうかというところは、是非それこそ若い方々が考えていただければなと思う。大規模量販店のシステムとは違うやり方で、かつ、観光客にも喜ばれるように、そして、高齢者に優しく、環境に良いというコンセプトで何ができるかということではないかなと思う。

Eさん：南国市は高齢化だとか、地産地消だとか、いろいろキーワードを考えていけばあると思うので、そういうことを今後私どもも努力していろいろ考えていきたいと思う。

【市街化調整区域の規制】

Fさん：高知大学医学部と今までいろいろな取り組みをしてきて、協議会を立ち上げて、健康等への取り組みを行っている。その中で出てきた我々では解決できない問題がある。開学以来30数年経つが、地域に、医学部を卒業された方が医院を建てられない。いわゆる線引きの問題である。この線引きの取っ払いをもうそろそろ考えていただきたい。学生の住みにくい街として、いわゆる明かりがないという苦情があり、防犯灯を今までに20程度設置したりしてきた。退職を迎えられた医師が子どもたちと一緒に住みたいが家を建てられないということで、高知のマンションを買わなければいけないという状況になっている。国に対して市ないし県が30数年何も手を打つことができない、これが高知県の実態かなと思う。これはおそらく霞が関というか、東京から見たときに、地方分権を高知ではできない、能力のない者ばかりだから地方分権をすることができないと思われるのではないかと。協議会の中では、学生の地域枠を作ってくれということが出て、これは5名の地域枠を作ってもらった経緯もあるので、それなりの活動はしているつもりである。

それともう1点、この間、岡豊城が史跡指定になるような方向になり、3月末に土佐のまほろば地区振興協議会というものを立ち上げて、これに取り組んでいる。高知の優良企業が一部、県外へ工場を建てたいという動きが出ている。非常に優良な企業なので、是非この土佐のまほ

ろば地域への誘致をトップセールスで取り組んでもらいたい。そうすることによって土佐のまほろばから四国のまほろばへというキャッチコピーもできているのでよろしくお願いします。

知事：企業誘致の問題は、またいろいろ工業団地の整備などをしていながら頑張っていきたいと思う。

最初の線引きの話というのは...

Fさん：医学部の周辺が、現在市街化調整区域である。

知事：調整区域であるから住宅が建てられないということで、市とよく相談もしてみないといけない話のようであるが、市のご意見はどうでしょうか。

南国市副市長：今、南国市でもちょうど都計の見直しをしているところで、地域の皆さん方にいろいろ協力を願いながら、マスタープランを作成しているところであるが、それを作り上げる段階で、県と相談していきたい。都市計画というのは、高知県で人口が減ってきている中で、枠の問題というのがあるようである。市街化区域の中でも家が建っていない、なかなかそこが充足してきていないということが一つあるが、県と相談しながら努力をしてみたいと思う。

知事：規制があるがゆえにその先の発展可能性が阻害されるというのは非常に残念だと思う。何か他に健康、安全面でどうしようもないというのであれば話は別だが。その点はよく相談させていただきながらやらせていただきたいと思う。

もう1点の学生の地域枠については拡大している。医師の確保は、今の課題でもあるが、若い人が少なくなっているというのもあるので、先々の課題として今からやっておかなければならない。地元の学生枠は今、段々増える傾向にあって、高知大医学部も増やされているので、県全体の医療行政に関わるものとして、我々も特に頑張っていきたい。

【福祉有償運送の許可に係る運営協議会の県の主導】

Gさん：先ほどからいろいろな方のご意見や地域の問題を聞いている中で思ったのは、平成12年から始まった地方分権の流れの中で、高知県として地域の自主自立性を重視した支援を行っていただきたいということと、南国市と南国市民で地方分権という意味をしっかりとらえてこれからの地域づくりをしていかなければならない、そういう指導をしていただきたいということ、また、先ほどの調整区域の問題にみられるように、地方の地域関連法案の縛りが強いという現状があるので、そういったことも県から国へしっかり訴えていってもらいたいということである。地域の中で富を流出させず、その剩余的なものを地域に還元していく、その富の分配では、障害者、高齢者、そういう人にも不公平のないような形の分配をしていかなければならないと考える。

中山間の高齢者だけでなく、南部、中心部の高齢者が病気になったとき、体が動かなくなったとき、ケアが必要になったときに、病院にタクシーや介護タクシーを使って行かれる。その費用が非常に高い。月6万円の国民年金で、週3回の透析治療をしている高齢者の方のケース

をとると、病院へ行くときには家族が乗せて行くが、戻りはタクシーや介護タクシーで戻ってこなくてはならない。その方は片道の交通費だけで、月3万円から3万5000円かかっている。それでどうしても福祉移送サービスというものが必要だと思う。私はNPOをやっていて、そういう福祉問題を取り扱っている。公共交通の議論、バスがなくなったところへどう足を確保するかということは今年2月から南国市でもされるようになってきているが、その議論と福祉移送サービスの議論とは同時には進行できない。どう違うかということ、病院等に行く必要がある人は、公共交通のバス停まで行けない。ドアツードアのサービスがどうしても必要になってくる。昔大豊町で、高齢者の移送サービスをやっていて、白タク行為で運転手さんが2回逮捕されている。その問題が全国で飛び火して、平成18年に道路運送法の改正が行われた。自家用車、普通免許でOKという法改正が行われたにもかかわらず、タクシー会社と一緒に地域協議会を作りなさいという条件がついてきた。これがなければ福祉移送サービスはできない状況である。高知市では協議会ができていたようだが、室戸市ではできそうになってだめになった。その他の市町村では、全くこの協議会の設立が進んでいない状況である。この協議会の設立について、市町村で作りにさいという形で今指導がされていて、南国市長さんも「これは何とかしなくてはならない」ということは言ってくれているが、南国市独自で作るとするのはなかなか難しい。県でも作れるということになっているので、県の行政指導力を発揮して県下の福祉運送の協議会を作っていただきたいと思うがどうか。

知事：少し事実関係を調べます。確かにドアツードアでないといけないというところは、Gさんがおっしゃられたとおりだと思う。

パンフレットの5ページの「1 中山間地域への総合対策」で、非常に重視したのが、水の確保とそして人の足の確保である。一つは、特に中山間地域だと、水道がないとか、簡易水道があったが壊れてしまったというような、基本中の基本というところで困っていらっしゃる方がいるので、簡易水道の設置という話と、もう一つが、例えば日常品の買い物に行かれるにしても、病院に行かれるにしても、移動されるに当たっての足の確保が非常に重要だということ議論して、中山間地域だとそもそも公共交通自体が初めからドアツードアだったりするというのもあって、そういう道の確保などに支援をするための事業を、ほとんど予算規模がなかったものを一挙に2億円くらいまで増額して新しく組み上げた。水は最低限の問題だと思うが、それに加えて足の確保という問題がものすごく大切だということは深く認識している。おっしゃられた協議会を作ることについては、市町村によってできているところとできていないところがあり、県でもできるという話であるので、そこは研究してみたいと思う。できればまずは市町村さんで検討していただければと思うが、それもできない場合で、かつ、先ほど申し上げた初めから公共交通がドアツードアみたいな場合とは別、あるいはそれでも対応できないようなところについて、どうしても必要だということがあれば、研究してみないといけないと思うので、それは研究させてもらいたい。

【AEDの各校への整備】

Hさん：子どもたちの教育とか健康活動の問題をお聞きしたい。今年南国市で児童虐待の非常に痛ましい事件があり、今まではこういった事件は南国市、こういう田舎ではないだろうと認識

していたが、こういった事件が起きた。今子どもたちを取り巻く環境をみると、インターネットや出会い系のサイトといった様々な環境の変化があり、また、先ほど知事も言われたいじめの問題なども総合的に考えて、子どもたちに生きる力とか命の大切さを各学校で教えているというのが現状である。その中で、中学生というのは部活動が盛んなので、心臓が突然止まったという事例が頻りに報告されているらしい。A E Dがあれば助かる命が、なかったら助からないので、A E Dを中学校には設置したらどうかと南国市教委の方にも要請は出したが予算がないという状況で、後援会や保護者に募金等を募って、早めに何とか購入しようと頑張っている。A E Dの導入状況は、学校によってまちまちになっている。命の大切さを子どもに教えて、子どもたちにもA E Dを使った授業もやっているようなので、是非県としてもA E Dの購入をお考えいただければと思う。

知事：全県内ということは大変だが、確かにそうかもしれない。相談をしてみないといけませんが、市町村によってまちまちということか。

Hさん：他の市町村までは調べてないが、南国市に小・中で17校あり、赤十字関連で寄附でいただいた学校もある。また、地域の体育館を建てて、そのときに地域が募金したお金で購入した学校や、学校の近くに公民館があって、公民館に設置されているから、いざとなったら公民館に取りに行くという学校とか、いろいろである。

南国市副市長：先日、少し消防の方で買っていて、小学校の方へ配置をするという話は聞いている。県の方に助成があるのかどうかということは今分からないが、必要なものについては普及できるように制度等の整備をお願いしたいと思っている。

知事：全県内にA E Dをという話ではあるが、県全体の予算でも、裁量的に使える部分というのは200億円くらいしかない。200億円というのは、大きなトンネル1本分の事業費相当くらいの金額である。歳出削減をどんどん進めてきたので、義務的、法律的に支払わないといけないお金がほとんどになってしまって、裁量的、政策的に新しいそういうニーズに対応できるお金というのは非常に少ない、200億円くらいしかないという状況の中で、A E Dについてどういう調達ルートがあるかについて勉強してみたい。いきなり全部というのは難しいかもしれないが、大規模校だったらどうかというのはあるかもしれない。そこは考えさせていただきたい。また、使い方を教えるという意義はあると思う。

Hさん：使い方は今消防で各学校を回って教えている。

知事：あとは施設があるかどうかということですか。公共施設などで、設置基準があり、置く必要があるのにないということであれば、おかしいということがあるのかもしれないし、A E Dについては勉強させてもらいたいと思う。

【案内板の整備、県外客に高知県で高知の産品を食べてもらう取り組み】

さん： 16 人の中で観光に直接関係しているのは私なので、今日は観光に限ってお話したいと思う。

最近、高齢者、障害者の方が毎日のようにグループなどで入ってきていただいている。高齢化社会の一つの先を行っていると思う。パブルのころは随分県外のお客さんの団体ツアーが多かったが、以降、四国架橋や高速道路の整備が進んで、現在はマイカーで高知県に入ってくるお客さんが増えてきている。道路の整備については、暫定税率が 10 年延期になったので期待しているが、県外のお客さんが来たときに「高知県は不親切だ」とよく言われる。「道路標識や道路案内が本当にまずい。県外はもっと走りやすい」と。やはり国道、県道、そして主要な市道にはもっとそういう案内板の整備をしていただきたい、人が多く集まる観光地については、そういう整備を見直して進めていただきたい。

もう 1 点お話ししたいことは、地産地消の関係で、高知県は日本一の田舎、これをキャッチフレーズに、そして外貨を稼ぐにはやはり観光が一番手取り早いのではないかと考えている。我々高知県の者が高知県の産物を食べる、それは地産地消でいいが、県外のお客さんを高知に呼び込んで、高知で高知県の産物を食べてもらうということをもっと知事さんが先頭に立って PR していただきたい。そうすれば、県外のお客さんが帰ったときに、スーパーなどで高知産のものを見たら、高知でおいしかったと思い出して身近に感じて買ってくれると思う。そうすると、園芸連を通じた出荷ももっと有力になる。県内のホテル、旅館、レストラン、そういう県外のお客さんが集まる場所で、売り込んで、食べていただいて、そして、その作り方が分かるレシピも教える、そこまでやらないと本当の親切ではないと思う。そういうことを、前向きに進んでやっていただいたら、高知県への観光人口も増えてくるのではないかと。

もう 1 点は、今年のゴールデンウィークなど、新聞等によると、五台山の牧野植物園が一人勝ちしている。あれは県が我々の税金を使ってやっているが、今は景気が悪いときだから、一人勝ちしないように、もっと民間の方に分けていただくようなこともお願いしたいと思う。

知事： 県立牧野植物園の件は、県外の人に来ていただき、いろいろお金を落としていってもらおうということなので、ご理解を賜りたいと思う。

一番最初の話と絡むが、観光も投資なくしてリターンなしだと思う。基本的な観光案内板などが不親切だ、高知県の観光案内板は他県に比べて整備が遅れているというお話を私も伺うので、これはもう着実に進めていきたいと思う。

もう一つ、高知のものを県外から来ていただいた方々に食べていただく、そのために旅館やホテルで地産地消でメニューを作り、かつレシピも含めて教えていくというのは、確かにおっしゃるとおりだと思う。私はこの間、高円宮妃殿下とずっとご同行したが、そのときのメニューは全部地産地消だった。あえて言えばコーヒーだけ違いますねというジョークのような話をしたが、妃殿下が食べられる料理が全部高知のものでフルコースができるというのが高知のすごさだと実感した。ホテルの中には通常のメニューでも出しておられるところもあるようであるし、そういうことをいかに PR してお客さんに楽しんでいただく、それにプラスレシピで自分で再現できるようにするということはそのとおりだと思う。私は、地場の産物を売るだけではなくて、その食べ方も一緒に売っていくということが大切だと思うので、今後東京などのアンテナショップで売り込んでいくときにはそうしたいし、レシピ集などの企画開発を助ける

ということも大切だと思っているので、取り組んでいきたい。

さん：ホテルなどで使っているところを私もよく承知している。ただ、まだ分母が少ないので、それを広げていただきたい。それと、県外のお客さんはお金の節約で、日帰りがものすごく多い。あまり寄り道をしないので、一人勝ちになるということで、それを申し上げたい。

【四方竹生産・販売の取り組み】

Jさん：四方竹は秋に生えるタケノコで非常に珍しいタケノコである。中山間地域の、なくてはならない特産品になっている。生産の方にも力を入れてきたが、やはり販売がものすごく大事であり、力を入れてきた。贈答品としても販売しているが、県などの協力をいただいて成長してきた。これからもこの特産品を見守っていただきたい。

知事：地産地消といっても、素晴らしい素材がないといけないということだと思うので、高知の強みのあるものを伸ばすということは大切だと思う。応援していく、大切にすることは必要だと思っている。

Jさん：知事さんも四方竹をご存知ですか。

知事：はい。市長さんのお部屋にも伺わせていただいたが、お部屋の中のテーブルの四隅全部に四方竹のシールを貼ってPRしておられた。

【農業近代化資金について】

Kさん：施設園芸で取り組んでいる品目がいくつかあるが、一つ、これは守りたいという品目がある。それはシシトウである。高知県が冬場の厳寒期に日本の80%のシェアを持っており、そのシェアの50%を南国市が持っている。日本の50%のシェアを南国市のシシトウ農家が背負っているということである。最近の油の高騰により、重油代が生産資材の中のほとんどの比率を占め、これが危なくなってきた。今年の冬は、油の高騰により、ハウスのサイドへ3重貼りの実施をした。新聞などには、バイオマスボイラーなど、重油を使わなくてもいいという物が出ているが、何百万円もかかる。県が半分補助しても、200万、300万の農家負担があるので、それは現実的に無理である。シシトウを守るために、県の近代化資金を利用させていただいて、そのほんの何%か、金利を県が出していただけたらと思う。また、近代化資金は、担い手でないと借りることができないが、今南国市の園芸を成り立っていかせているのは65歳~70歳以上の者である。であるので、その近代化資金を、特別に高額でもないのに、担い手だけではなく、一律に誰でも借りられるような特別措置を取っていただきたい。

知事：原油対策にはものすごく頭が痛ませている。4月から座談会を始めて以来、土佐市に行っても、芸西村に行っても、安芸市に行っても、田野町に行っても、皆さんに言われたことであり、今後の対策を考え始めている。正直なところ、ここまで高騰してきた、かつ、本県に5000くらい施設園芸農家があるという中で、果たして一体どこまでのことができるかということに

頭を悩ましている。すべての方が満足するよというの、どうしても規模が足りなくてできないと思うが、一定の選択と集中というか、ある程度選んでやっていくということは必要かもしれない。できるだけ効果があるような施策というの何かを研究したい。

Kさん：南国市の中でいくつも品目があるが、どうしても守らないといけないのがシトウで、その全国シェアを捨てたくないという思いでこれを取り上げたので、よろしくお願ひしたい。

司会：Kさんのお話は、農業近代化資金というのがあり、その資金を借りるのに、認定農家でないと借りられない、認定農家ではない人にも貸すようにしてほしいということと、その近代化資金の利子を見てくれないかということですよ。

知事：研究したい。国の制度であれば、県で要件を変えることができないことというのものもあるかもしれない。それなら、県単独でどういうことができるのかということの研究する。重大な問題だと私も思うので、全体の資金の中で限りがある中ではあるが、高知の強みである園芸農業のために何かできないか、工夫をさせていただきたい。

【土佐ジロー飼育の取り組み、南国市の北と南での観光ツアー】

Lさん：現在、4000羽前後の土佐ジローを飼っているが、当初から、南国市が、食の安全ということで、学校給食で取り入れてくれたことで、大変励みになった。現在もそれは一つの柱になっている。立地条件が非常にいいので、体験型の観光や、旬の食材を使って、野外で出前出張のシェフと一緒に料理を学ぶとかそういう企画などもしていきたいと思っている。

もう1点は、地域の福祉ということもずっと自分の中であって、偶然にも今日、就業支援センターの実習生を4名受け入れてスタートしたところである。いろんな方に関わっていただき、土佐ジローと地域の農業を発展させていければいいなと、これは大きな夢として思っている。鳥小屋を建てる前は、誰も歩かない場所だったが、建てた後は、家族が子どもとお休みの日に来ている。そういうのを見て、やはり鳥とか畑が土地を活かす、地元の方でも心が和んでいるということに気がついた。県外の人にはなおさらだと思っので、南国市で北と南で観光ツアーを組むとか、関連させていくことも可能ではないかなと思っでいて、そういうことに力を入れてこれからは頑張っていきたいなと思っでいる。

もう1点は、1.5次産業の商品を加工するという点で、私は土佐ジローを飼っでいてその原種はアメリカのロードアイランドレッドなので、アイスクリームなどに加工したものをアメリカに里帰りというようなことができないかなと夢ではあるが思っでいる。

知事：南国市の北と南で観光というの素晴らしいと思っでいる。高知には、東京から来るのも飛行機で往復5万6000円から6万円くらいかかって、さらに、幡多地域は東京から最も時間距離として遠いところだと言われる。来るのに手間とお金がかかる分、長く滞在してもらって、じっくりと味わってもらうタイプでないとだめだということだと思っでいる。単品ではなかなか勝負できないとしても、つなぎ合わせたら勝負できるだろうと思っでいる。滞在型になるためには、つなぎ合わせることと、もう一つはできるだけ体験型でやっていただくことが必要ではないか。聞いたこ

とがあるが、見るだけの観光はリピーターはあまりつかないそうで、体験すると、おもしろかったらもう1回やってみたいというので、リピーターとなってくれるそうである。我々も今、「滞在型・体験型観光の推進」を頑張っているので、南国市の北と南とか、それぞれの地域地域の観光資源というのを磨き上げていただき、それをつないでいく取り組みを今後進めていきたいと思っている。「花・人・土佐であい博」でも、うまくいっているところといかないところとの差があるので分析を行っていて、地域地域の観光協会の方などにこの3～5月の結果などをフィードバックしていきたいと考えている。このであい博の機会を活かして、地域地域の観光資源というのを磨き上げていく、今年ではあい博だが、来年以降もそういう取り組みを続けていただくことで、高知県の各地にいろんな観光地ができる、結果として数珠つなぎで高知県に来ると長い時間体験できて楽しめるという観光地づくりを目指していきたいと考えている。

【修学旅行の誘致】

さん：知事さんには修学旅行を誘致していただきたい。

知事：それは本当に頑張りたい。この間、東京からだと飛行機代がネックになると言われた。ただ、愛媛とか、高松とか、大阪とか、もっと近いところで何かできないかということも考えられると思う。逆に、高知市の子どもを田舎に、県内でということも考えられると思う。

【高知新港東船だまりへの係留設備の整備】

Mさん：南国市には昔から港がないが、高知新港の東船だまりに作っていただき、本当に素晴らしい。何が素晴らしいかという、エンジンをかけて漁場まで数分である。以前は仁井田の方から大体30分、往復行き帰りに1時間かかっていたものが、わずか数分で漁場で仕事ができる本当に素晴らしいメリットがある港である。ただ、いいところだけではなく、海が荒れたときには必ず避難をしなければならぬ、これが一番のネックである。5月から今日まで4回避難している。波が荒れたときでも、船を係留できるくらいの設備をお願いしたい。

知事：5月から4回ということで、研究をさせてもらいたいと思う。新港も整備が中途半端で終わっていて、まだまだやるべきことがいくつかあるが、他方で、今後の整備の利用可能性はどうかということも研究しながらやっていかないといけないということで、勉強会を立ち上げて、やり始めているところである。

【土佐刃物の小中学校等への導入】

Nさん：知事をお願いしたいのは高知県の推進している地産地消を刃物までやってもらえないか。公共施設で使用しているのを見てみると、刃物産地の新潟とか岐阜県などを使っているが、そういうところに高知の刃物を使ってもらいたい。2004年度は、鍛冶屋関係の事業所が160軒あって、200数十名ほどいた。ここ4年の間に鍛冶屋さんは50事業所しかなくなっている。20代から30代は9事業所、40代と50代で20事業所、60代で10事業所となっていて、あと5年後にはなくなるのではないかと思う。高知県内でだけでも使ってもらったら、後継者が出てくると思う。小中学校なども、役所が窓口になって包丁などを購入しているが、問屋さんに頼ん

で問屋さんが在庫がある分から納入しているというところがある。南国市の鍛造者組合などに依頼してもらったら包丁を作っている人がたくさんいるので、是非そういう方向でやっていただきたい。林業の衰退もあり、林業とともに育ってきたというのもあって、間伐しなくなったら、ナタなどが出なくなった、ほとんど仕事がない状態である。500 円の税金などを集めてやっているが、あれが刃物業者に全然回ってきていないのが現状である。是非公共施設だけでもお願いできればと思う。

知事：地産地消というのは決して食べ物のことだけではないと私も思っているので、できるだけ県内のものを使っていただくということが大切なことだと思う。一つだけ、公共調達という話になったときには、同じ機能ならどうしても安い物でというのがある。

Nさん：知られていないだけで、価格的に同じであり、使用率からいうと、10 倍もつので、よろしくをお願いしたい。

【「ハガキでごめんなさい全国コンクール」のPRと作品の展示】

Oさん：県の地域づくり支援課の方には大変お世話になっている。私たちの街は「ごめん」という全国的に珍しい名前を売りにイベントを主催している。私たちの街は小さい街で、近代化の中で商店街も衰退して、段々商店街は人が少なくなってきた。そんな中、たまたまやなせたかし先生が後免野田小学校出身ということで、先生がこの街を訪れたときに、先生の時代と余りにも変貌ぶりがひどくて、「ごめん」という名前を活かしたイベントはないかということで、「ハガキでごめんなさい全国コンクール」を始め、今回で6回目になる。しかし、まだPR不足であり、これをもっと全国的にPRしてもらいたい。県はまんが甲子園に力を入れてお金をかけているようだが、こちらのコンクールのPRも行っていたきたい。知事さんも審査に来ていただきたいと思うし、公共の場で、「ごめん」と「いの」という街があるので、「ごめんへ寄って、いの行こか」というふうにダジャレっぽくやっていただければと思う。

知事：「ハガキでごめんなさい全国コンクール」は有名で、高知の人間だからかもしれないが、東京にいても私は知っていた。それはもっともっとPRしたらいいと思う。

まんが甲子園の先にあるものというのは、私は夢を持っていて、高知というのは地理的に辺境の地にあって、物流コストという点においてどうしてもなかなか勝負できない、太刀打ちできないところがどうしても出てくる。ただ、いわゆるコンテンツであれば、物流コストは全く関係ない。全国でも多分人口一人当たり漫画家の数というのはナンバーワンではないだろうか。高知のマンガ、すなわち高知のソフトコンテンツをどんどん活かしていくような産業づくりができないかなと思っている。今年からまんが甲子園ももっと趣を変えて売り込んでいこうと思っているが、そういうソフト系のイベント同士でのコラボレーションが大切で、例えば、お互いがお互いをアピールしあうということなども大切なのではないかなと思っているので、そういうこともよく考えるようにしてみたいと思う。

Oさん：今まで 10000 通余りの作品が寄せられていて、実際にいい作品がたくさんあるが、展示

スペースがない。今は街並みに飾っているが、1年ほどするとやっぱりその展示物もだめになる。入賞者や応募者が結構全国から見に来ている。5月の連休とか夏休みに、どこに作品を展示しているかという問い合わせもあるので、できれば作品を常時見学できるスペース、施設が欲しい。一応第1回から第3回までの本はできあがっている。

知事：常設のということですよ。これについては市は何か考えていないでしょうか。

南国市副市長：今のところそういう発想はないが、今後活用できるところがないか考えてみたい。

知事：何か考えてみて、ご連絡を差し上げたいと思う。

【小学校の統廃合】

Pさん：最後だが、私から一つだけ。簡単に言うと、小学校の統廃合をできるだけやめて残してほしい。過去に高知県の元気者交流会という地域づくり団体の会に所属し、いろんな地域に伺ったが、小学校がなくなったところの衰退の早さは驚くほどである。小学校がなくなると、帰ってくる若者がいなくなり、経済とか産業とかいう以前に若者が帰ってこないということで、高齢化がどんどん進んで、限界集落に近づいていくという現状がたくさんある。南国市でも小規模校がある。地域によっては大きい学校の方がいいという声が出る場合もあるかと思うが、そうでない場合はなるべく少人数になっても残してもらうことが、高知県の田舎の存続の大きな条件になると思うので、是非その辺を考えていただきたい。

知事：中山間地域に行ったときによくこの話を伺う。小学校は地域のコミュニティの中心という役割もあつたりするので、人数だけで単純に効率化のために統廃合するというものでもないと思っている。ただ、他方で、人数の少ないところで中学校に通っておられた方が、高校に上がったときに大人数のところに行かれたときに大変だという話も伺うことがあるので、やはりそこは地域の方々のお考えだと思う。よく地域のお話を聞いてということだと思うので、機械的にというやり方はやってはいけないと思っている。

司会：最後に、3人ほど短めにどうしてもという方はお願いしたい。

【土佐ジローのコメントへの協力、グリーンツーリズムの開催場所について】

Lさん：2点ほど簡単に。1点は土佐ジローのメスの親鶏とオスの若鶏を秋か12月にキャンペーンで1000名様くらいにプレゼントする企画が上がっている。知事に土佐ジローの若鶏と熟鶏肉を食べていただいて、感想・コメントをいただけたらありがたい。

知事：分かりました。

Lさん：もう1点は、グリーンツーリズムの研修に参加したいが、研修場所が西土佐の方であり、もう少し近くであればと思う。

知事：今すぐは分からないのでまた調べてお答えしたい。確かに、いろいろな場所でということ
でないと、それぞれの地域の人が行きにくいとは思う。

【農業の後継者対策】

Aさん：言い忘れていたが、農業の後継者対策で、あと5年、10年経つとかなり後継者が難しく
なると思う。今、20代、30代が非常に、高知県でも、全国でも少ないと思う。魅力ある農業に
なるようお願いしたい。

知事：農業の後継者対策、究極の後継者対策は、競争力があって、最終的に現金収入にもつなが
っていく農産地づくりが大切であり、これがまず根本的な対策だと思う。そのためにも、例え
ば、ハネ物を捨てずに加工して売るとか、販売所を整備するとか、その一連のものを全体とし
て整備していくことが重要だと思う。それが一つである。もう一つ、より直接的な対策として
今年からやり始めることにしているのは、高校生などに、農業なら農業という仕事の魅力を体
験してもらって感じてもらうこともまた大切だと思う。農業高校の若者でも農業に就かない人
も結構いるということもあたりして、実際に農業体験をやるインターンシップというのを今
年からやることにしている。高知県の富の源泉たる1次産業、その1次産業の産地ほど、どち
らかかという、少子化、高齢化が進んでいて弱っている、だからどんどん高知県は小さくなっ
ていってしまっている。そういう現状にあると思っているので、これを逆に変えていかないと
いけない。そのためにいろんなことをやらなくてはいけないと思っている。ちなみに、高知県
の主要なユズの生産地をみると、ここ10年間、ある1か所を除いてすべてのユズの生産地は、
15歳から24歳の若者の人口が15%とか30%減少している。1か所だけ増えているところ、そ
れは馬路村である。農業で物を作る、それを加工して売る、しかもそれを都会で売る、アメリ
カでも売る、そういう取り組みを進めていると、やはり仕事が面白い。そうなれば若者も残る、
帰ってくるということだと思う。

【先生の2年次の職場研修の見直し、警察署再編について】

さん：教育委員会の話であるが、今、学校の先生は2年次に6か月の職場研修をしている。あ
れはどれくらい効果があるか疑問である。うちもずっと数年受け入れてやっていて、去年と今
年と中堅の先生を入れているが、そちらの方がずっと効果があるように思う。なので、2年次
をやめて、もっと中堅の先生、又は教頭になるかなったばかり、そちらを主にやったらどうか。

もう一つは警察の関係で、再編をやっているが、今のやり方については疑問に思うところがある。
特に南国署の場合は、高知署に次いで、2番目に忙しい。今はもう南署を追い抜いている。
私も友の会南国の支部長をやらせてもらって、県の理事をやらせてもらっている。いろん
な話をよそからも聞き、やはり郡部の方は今の計画の見直しをしてほしいという声が多いよう
であるので、考えてみてもらいたい。

知事：2年次だとどうですか。実はそれに興味があり勉強していたところです。

さん：採用されたばかりで、まだ学校の現場も分からない状態で現場に行くより、ある程度学校のことを分かってから、現場の今の民間企業のやり方、システムを勉強する方がましではないかと思う。

(知事のまとめ)

本当に遅い時間まで誠にありがとうございました。

今日は比較的、個別具体的な話を伺えたと思う。この場ですべて返答させていただけなかったこともあったが、記録をして、後でお答えさせていただく。今日いただいたお話を今後の県政運営の参考にさせていただきたいと思っている。聞きっぱなしということではなくて、伺ったことをしっかりと踏まえて今後の対応策に活かしていきたいと思う。例えば、重油高騰の話はいろんな形でお話を伺う。ところところによってその具体論は違ったりもするわけだが、ただその切実さはすごく伝わってくる思いがしているし、他方、産業振興についていいお話をそれぞれ伺ったと思っている。それを活かして頑張ってもらいたい。